

## 保田與重郎の思想形成——「蝸牛の角」における詭計

渡 辺 和 靖

Kazuyasu WATANABE

(哲学教室)

### 第一章 辻氏と和辻哲郎

保田與重郎の初期の小説作品について、神谷忠孝氏は、『保田與重郎論』(昭和54年、雁書館)で、

これらのうち保田與重郎という個性的な文学者の生成を知る上で重要と思われる作品は、〈錯乱〉を主題にした作品であり、自伝的とみられる作品は年代順に時間が逆行しているところに特徴がある。(40頁)

と総括している。これを受けるような形で、桶谷秀昭氏は、「保田與重郎——昭和批評の一軌跡」(『新潮』昭和57年5月)で、保田の「小説群」を、「アンニユイと自意識の錯乱を主題とした多くは独白体あるひは手記体のフラグメント」と、「抒情的な青春小説の系譜」の「二つの系列」に分類している。(152頁)

昭和八年一月発行の『コギト』第九号に掲載された、保田としては八番目の小説となる「蝸牛の角」は、その平明な文体において「自伝的」作品系列に近いといえるが、作者自身とは明瞭に区別される、辻氏という人物を主人公に設定している点で、神谷氏が指摘した二つの系列のいずれにも属さない、固有の構成と内容を持つ作品といえる。そのためか、神谷氏は、「蝸牛の角」について、わずかに「『明治の精神』再検討」と寸評を加えているにすぎず、桶谷氏は、触れることすらしていない。

「蝸牛の角」は、また、ストーリー展開のうちに、たとえば、

いたるところに怖ろしい情熱がうごめいてゐる。父が維新の精神を代表してゐるやうに、今日の若い精神は明日の時代の精神を代表してゐた。たゞ現れ方や方向が異つてゐるだけだつた。(『保田與重郎全集』——以下『全集』——第1巻, 172頁)

など、随所に時代批評をくりひろげている点で、「桐畑」(『コギト』昭和8年2月)など、いくつかある同系列の作品とも区別される。この作品は、むしろ、小説という形式をとってはいるが、日本の古典を題材に自己の思想を自在に展開するという、後の保田の評論の固有のスタイルの方向を目指しているとしても評価すべきであ

ろうか。<sup>(1)</sup>この意味でも、「蝸牛の角」という作品は、保田與重郎の出発を知るために重要な位置にあるといえるのである。

保田の初期思想の分析という作業のなかで、この「蝸牛の角」をいち早く取りあげ、詳細に分析したのは、磯田光一であった。磯田は、『比較転向論序説——ロマン主義の精神形態』(再版, 昭和43年)に収録された「ナショナリズムの美学——コールリッジと保田與重郎」において「蝸牛の角」を取りあげ、「辻氏という倫理学の教師を登場させて、彼の父親と辻氏自身の教え子たちとのちがいを描いたものだが、これは父親によって表象される明治人の倫理感覚と昭和時代の人間との落差を保田がどうとらえているかを見る上で、はなはだ興味ぶかい」(215頁)と論じ起こし、つぎのように考察している。

問題はむしろ保田が中年の辻氏をこの小説の主人公に選んだところにあつたと思われる。世代的には当時保田は「若い学生」たちの世代に属している。そして彼らの多くは辻氏の父の世代、つまり祖父の世代を古いものと無視している。しかし、その両者の中間項にある辻氏にとっては、両者の歩みの方向が異なっているにもかかわらず、両者に共通した日本的な情念が理解できるのである。こう考えてくるとき、この小説の辻氏が少なからず当時の保田與重郎の心情を代弁していることは明らかであろう。(216頁)

このように論じた後、磯田は、「蝸牛の角」の最後のシーンを引用する。<sup>(2)</sup>

辻氏は椅子を立ち上りながら、この時初めて眼のまへにある聖林寺十一面観音の写真を見た。かつて、この像を我国第一等の傑作と熱愛し指命したことが気持の上であくどく思ひ出された。今の時には全く偶然にこの写真を鮮かに観た。それから極めてたやすくこの「傑作」が、維新の頃久しい間三輪山麓に風雨にうたれてころがつてゐたといふ伝説を思ひ出した。それは古い頃聖林寺を尋ねた日だつた。氏は既に物故した先代の住持の肖像を見ながら、この像を荒廃から救つてくれた僅か

の努力に感泣するに近い感謝の心をしみじみ味つた。初秋の頃だつた、大和の桜井町を少し離れたこの小さな山寺には樋を伝ふ水の音が座敷の中まで聞こえてゐたのを思ひ出した。こんな瞬間の感想にも時代のプロヒイルが動いてゐるのを感じた。それは維新の精神の一面として氏の心へ動いてきた。初めて氏は氏が古代の芸術を愛してゐる心が、殆んど気づかぬ位に強力であつたことに気付いた。(『コギト』昭和8年1月、134頁)

磯田は、ここに示された辻氏の感慨を「保田の心」に重ね合わせて、「このような維新の精神への共感を示しつつ、なおかつ古美術への共感にもつながっていることは、彼の時代関与が倫理的であるとともに多分に審美的なものであったことを物語っている」と指摘し、つづけてつぎのように論じている。

古美術の世界は、大衆の心の表現として完璧な時代の表現として過去のかなたにある。そこには「個」と「全体」とは有機的な統一のうちに調和を保って存在している。しかし現在、周囲を見わたすとき、そのような調和の幸福は見いだすべくもない。自己の内部にはすでに荒廃した空白しかない。その空白の基底にうごめいているのは、維新の精神によって表象される伝統的な「血」と「渴望」である。左翼の実践者はその渴望をこそ生き、そこに劇的人生を具現したが、その劇が転向によって挫折をしいられたとき、はじめて彼らの内面の劇は保田と正当に噛みあう地点に到達するのである。(217~8頁)

磯田のこの論稿は、保田の初期思想の研究としては、先駆的なものであるとともに、資料と考察の両面において、今日の水準といえどもまだこれをじゅうぶんに凌駕していないと評価しうるものであるが、「蝸牛の角」の考察に限って言えば、それは真相からほとんど外れていると断定せざるをえない。このような事態がなぜ生じたのかといえ、磯田が、作中の主人公辻氏を保田自身であると単純に前提してこの作品を解説してしまったからにほかならない。

これはほとんど自明なことであるが、「蝸牛の角」の主人公辻氏は和辻哲郎がモデルである。しかも、保田は、明らかに、読者がこのことを理解したうえで作品を読んでくれることを期待して、いたるところに伏線を張りめぐらせているのである。磯田が、このことを見逃したのか、あるいは、知っていて無視したのか定かではないが、主人公の辻氏が和辻哲郎であることを前提としなければ、「蝸牛の角」に託された保田のメッセージを解説するのが困難であるということだけは間違いない。

辻氏が和辻であると理解すれば、磯田のいうように「辻氏が少なからず当時の保田与重郎の心情を代弁している」どころか、保田が、辻氏を極めて揶揄的に取

り扱っていることが直ちに明らかになるだろう。まさしくこの作品は、和辻哲郎を揶揄し、あわよくば批判しようとする詭計を秘めて執筆されたものであった。この点を、さきの引用部分について考察してみよう。

辻氏が「眼のまへにある聖林寺十一面観音の写真」から、それをめぐる「この「傑作」が、維新の頃久しい間三輪山麓に風雨にうたれてころがつてみたといふ伝説」へと思いをめぐらす場面である。この箇所は、基本的には、和辻の『古寺巡礼』を素材として構想されたものである。つぎに、『古寺巡礼』から該当部分を引く。

奈良博物館において、玄関に入ったホールで、和辻は、まず正面に陳列された聖林寺の十一面観音像に一目で心を奪われる。和辻は、その感動を、以下七頁にわたって、綿々と記述している。(保田が参照したと考えられる大正十三年再版本を使用する)<sup>(3)</sup>

聖林寺の十一面観音は偉大な作だと思ふ。肩のあたりに少し気になるところがないでもないけれども、全体の印象を傷けるほどではない。これを三月堂のやうな建築のなかで、あらゆる周囲の美しさの内に浮べて見たら、あのいき〜とした豊麗さはどんなに輝いて見えることだらう。(65~6頁)かくて我十一面観音は、幾多の教典や幾多の仏像によつて培はれた、永い、深い、さうしてまた自由な、或作家の幻像を結晶させた。そこには印度の限りなく縦まな神話の痕跡も認められる。半裸の人体に清浄や美を看取することは、極東の民族の気質にはなかつたであらう。またそこには抽象的な空想のなかへ写実の美を注ぎ込んだ健陀羅人の心も認められる。あのやうな肉づけの微妙さと確かさ、あのやうな衣のひだの真に迫つた美しさ、それは極東の美術の伝統にはなかつた。また沙海のほとりに住んで雪山の彼方に地上の樂園を望んだ中央亜細亜の民の、烈しい憧憬の心も認められる。(中略)人間の心を奥底から掘り返し、人間の体を中核まで突き徹し、そこに摺まれた人間の形而上的要求と神秘なる感性の美とを、一挙にして一つの形象に結晶せしめたのである。／かくの如き偉大な芸術の作家が、我島国の製作家であつたかどうかは、我々は知らない。しかし唐の融合文化のうちに生れた人も、養はれた人も、黄海を越えて我風光明媚な内海にはいつて来た時に、何等か心情の変移するを感じないであらうか。漠々たる黄土の大陸と、十六の少女の如く可憐なる大和の山水と、それが何等か気分の転換を要求しないであらうか。(68~9頁)

肉づけが豊満でありながら、肥満の感じを与へない如き、四肢のしなやかさが柔かい衣の皺にも腕や手の円さにも充分現はされてゐながら、しかもその底に強剛な意力の閃めきを持つてゐる如き、

総てこの気高さの印象の因をなす。殊にこの重々しかるべき五体が、重力の法則を超越するかのやうにいかにも軽やかな、浮現せる如き趣を見せてゐることは、この印象の因として見のがし難い。

(71頁)

横から眺めると更に新しい驚きが我々に迫つて来る。肩から胴へ、腰から脚へと流れ下る肉づけの確かさ、力強さ。またその釣合の微妙な美しさ。これこそ真に写実の何であるかを知つてゐる巨腕の製作である。我々は観音を見てその写実的成功の如何を最初に心に浮べはしない。(中略)この像くらゐ立派な写実を根拠として立つてゐるのを見ると、今更らしく感嘆しないではゐられない心持にもなる。(72~3頁)

ギリシャ文化がガンダラ美術を媒介として日本に東漸したとする健陀羅幻想をモチーフとした美しい文章である。和辻は、「我国第一等の傑作」とは言っていない。しかし、これだけの賛辞に接して、保田がそうした印象を受け取ったとしても不思議ではない。『古寺巡礼』のもう少し前の部分で、乙君との「天平随一の名作」をめぐる会話のなかで、和辻が「僕はたゞ一つ離して見るならば、寧ろ聖林寺の十一面を取る」(60頁)と発言しているのも、保田の記述になにがしかの影響を与えていたかも知れない。

保田の「蝸牛の角」における展開と同じく、『古寺巡礼』でも、和辻の連想は、聖林寺十一面観音の讚美から、ただちにその発見の「伝説」へと移っていく。

——さてこのやうな偉大な作品が、昔はどういふ取扱をうけてゐたか。作者の名が忘却せられた位は何でもない。実をいふと、五十年ほど前に、この像は路傍にころがしてあつたのである。尤もこれは人から伝へ聞いた話で、歴史的にどれほど確であるかは保証の限りでないが、とにかくその人の説によると、この像はもと三輪山の神宮寺の本尊であつた。さうして神仏分離の際に、明治維新を誘導した古神道の権威によつて、残酷にも路傍に放棄せられるやうな悲運に逢つた。もとよりこの放逐せられた偶像を、自分の手に引取らうとする篤志家などは、この界限にはなかつた。そこで幾日も幾日も、我気高い観音は、埃にまみれて雑草のなかに横たはつてゐた。或日偶然に、聖林寺といふ小さい真宗寺の住職がそこを通りかゝつて、これは勿体ない、誰も拾ひ手がないのなら拙僧がお守を致さう、と云つて自分の寺へ運んで行つた。——(73~4頁)

保田の文章では、初秋の一日、聖林寺を訪れた辻氏が、直接住職から先代にかかわるこの「伝説」を聞いたように叙述されている。「榎を伝ふ水の音が座敷の中まできこえてゐた」という印象的な思い出の断片まで保田は書き添えている。おそらく、それは、保田自身

の体験を記したものと思われる。あるいは、保田は、和辻の『古寺巡礼』の記述に惹かれて、この小さい山の寺を訪れる気になったのかも知れない。聖林寺のある桜井町は、まさしく保田の生まれた町でもある。<sup>(4)</sup>

これにつづく「維新の精神」にかんする辻氏の感慨も、『古寺巡礼』と比較してみる限り、和辻のものではない。『古寺巡礼』では、むしろ、「明治維新を誘導した古神道の権威」の「残酷」な行為への非難めいた響きを感じとることができよう。従つて、これは、保田自身の感慨の表白として読むことができる。しかし、これらの事実は、保田が、自らの体験と和辻の『古寺巡礼』の記述とを巧みに綴り合わせて「蝸牛の角」という作品を制作したという以上のことを意味するものではない。ここから「当時の保田與重郎の心情」を読みとった磯田の誤読には、やはり、弁護の余地がないと言わなければなるまい。

じつは、磯田は引用していないが、さきの文章につづく、つぎの一行にこそ、保田の「蝸牛の角」という作品全体のモチーフが示されているのである。「辻氏はそのまゝ、大きい瞳を骨ばつた頬のおくへおし込めて立つてしまつた。」

つまり、辻氏は、聖林寺十一面観音によって、自らの内面に、「維新の精神」への共感、「古代の芸術」への深い愛情が蔵されていることに気づくのだが、つぎの瞬間、そうした柔らかい心の襞をただちに固い理知の壁の奥へと押し隠してしまうのである。作品の最後にこのシーンが置かれたポイントは、まさしく、ここにある。辻氏の生き方が、自らの内面的な要求にことさらに眼を背け、理知という鎧によって心情を覆い隠す、不誠実なものであることを読者に印象づけることが、保田の意図なのだ。「あくどく思ひ出された」といった表現のうちにも、そうした和辻への揶揄の姿勢が露骨に現れている。そして、こうした保田の態度は、「蝸牛の角」という作品の全体にわたって貫かれていることを指摘する必要があるだろう。

## 第二章 「理知」と「情熱」

保田が「蝸牛の角」において、和辻哲郎をどのように扱っているかについて、全体をとおして考察していく。冒頭、辻氏は、今朝早く訪問してきた、マルクス主義を信奉する堀尾という学生のことを思い出して、「憂鬱」な気分には陥っている。

勿論氏の学識から若い学生を説服することは容易だつた。併しそれは辻氏の年来をさめてきた学問の多識がときふせるだけで、決して心の情熱がときふせるのでない。明敏な辻氏には一そうそれがよくわかつてゐた。(156頁)

保田は、「学問の多識」と「心の情熱」を二元的に対立させて、それが辻氏の「憂鬱」の原因であることを暗示する。保田のモチーフが、ここに既にはっきりと

提示されている。

辻氏は、学期の終わりに、晩年のカントが学生との「食事」や「討論」を楽しんだというエピソードを「調子につけて愉快地話したこと」を「痛切ににがにがしく」思い出していた。おそらく和辻は、「蝸牛の角」の舞台となっている大正十二年に勤務していた東洋大学で、あるいはこの作品が執筆された当時奉職していた京都帝国大学の倫理学の講義の中で、カントについてのエピソードに触れたかも知れない。しかし、そのことを思い出して苦々しい思いに浸っている辻氏の姿は、疑いもなく保田の創作である。「蝸牛の角」を読むものは、ここから、ただちに、学生たちに共感を懐いているかのように装う辻氏が、実は、学生たちの行動に敵意にも似た感情を深くわだかまらせていることを理解するであろう。そして、それを、現実の和辻哲郎に重ね合わせることになる。

又台所の器物の音がしつこくした。かういふ種類の音はきく方が愕然とする。よくよくこんな間どりの下手な家に住んだものだ。辻氏は下唇がゆがむやうな気がした。これは辻氏がいつも学生から嫌がられる氏の独得の表情の一つだつた。その後へきつと例の尻上りの皮肉がとび出した。しかし今では皮肉のやり場がなくなつた。だから氏は止むを得ず、いつか哲学の雑誌へ書いた「鎌倉からのたより」といふ文章のことを思ひ出したのである。その中へこの静閑な住居の讃詞を長々書いたことをふと気づいたからだ。それへわざとに今の皮肉を落つかせようとした。しかしこまできるともう皮肉は甘つたるい慰戯にすぎなかつた。精神といふやうなものの中の、ことさら弱い姿を自省させられてゐる悲哀感がさきに立つてしまつた。(158頁)

和辻が哲学の雑誌に自宅を讃美する文章を執筆したというのは、あるいは事実であるかも知れない。(これについては未見である)しかし、台所の物音にイライラしながら、そのことを皮肉な気持ちで後悔する辻氏は、明らかに保田の創作である。ここから、読者は、外部にたいしては己を取り繕いながら、心にもない言辭を弄する辻氏の自己欺瞞を読みとり、そこに和辻哲郎の姿を重ね合わせることになる。

辻氏は若くしてその明敏さを世間的にうたはれてゐた。その専門の方面では世界的に及ぶものが少いと云はれてゐたK博士と博士の専攻の学問について論争しても、相手を沈黙せしめることが出来た。そんな場合の抜け道を心得てゐるのが辻氏の明敏さの唯一の要素とさへ思はれた。だから篤学な若いH氏をたゞくにしても少しの器用さで充分だつた。辻氏にはそれがすべての明敏さを意識する手法だつた。氏が再興した偶像にしても、それは古い時代の熱情のたねばならなかつた止みが

たい偶像でなかつた。明敏な氏の思ひ付の知識的遊戯に過ぎなかつた。つまり氏の哀しい詩だつた。そしてこんな詩が氏の全部の日常の関心さへみじめなものを意識せねばならない境遇へひきずり込んだ。(同)

この部分には、二つの意図が隠されている。第一に、ここで、保田は、主人公である辻氏が、他でもない和辻哲郎であることを、読者に、あからさまに明示しようとしている、ということである。それは、「蝸牛の角」という作品が、その主人公の辻氏が現実の和辻哲郎であることを、読者が知悉したうで読まれることを、保田が期待していたことを示している。

「氏が再興した偶像」という部分が、大正七年に出版された和辻の著書『偶像再興』を指示していることは、当時の読書人にとってはほとんど常識に属することであつたろう。また、少しでも学界の事情に通じたものにとって、「K博士」が印度仏教学の泰斗木村泰賢であり、「若いH氏」がこの論争が原因となって予定されていた東北帝国大学のポストを高橋里美に奪われたと噂される藤岡蔵六であるということを知覚することは造作のないことであつたはずである。このことをとおして、読者は、これら二つの有名な論争が、和辻にとって、結局、「止みがたい」「情熱」の所産ではなく、自らの「明敏さ」を誇示するための「知識的遊戯」でしかなかったかのような印象を与えられることになる。そして、これによって、読者は、辻氏の心を執拗に責め苛む「憂鬱」が、過去における自らの誠実ならざる行為への和辻の反省のように見えてくる仕組みになっているのである。これより少し後の部分に、「しかしH氏のこと、最も悪い方法でたゞつけたH氏のこと名状しがたい苦しさで思ひ出された」(159頁)とあるのは、保田の意図がどこにあるかを明瞭に物語っている。<sup>(5)</sup>

第二の意図は、この作品のモチーフともかかわるが、ここで、保田は、辻氏の内面の葛藤を、「明敏」「器用」「知識的遊戯」などの言葉によって指示される理知あるいは論理と、「情熱」「止みがたい」といった言葉によって方向づけられる心情あるいは感情との、二元的対立として提示しているということである。この引用のすぐ後の部分に、「しかし因果の関係はたやすく頭の中で動かしても、それとは別な気分の構造は一足も動かうとはしなかつた」(159頁)という記述が見える。「因果の関係」が理知あるいは論理を意味するから、明敏な辻氏の内面を、理知や論理によってはどうしようもない「気分」=憂鬱な気分が蝕んでいるという構造が、ここに浮かび上がってくる。

再び、辻氏の思いは、今朝の堀尾との会話にもどる。堀尾は「先生哲学が亡びるといつた考へ方は……？」と問いかけてきた。辻氏は、大震災以来感じていた「不安」を「足もとから指さ、れる気がした。」しかし、辻

氏は、「その学生の表現のあらゆる場合を分析してその立場を論理的に追ひ込んでしまった。」その後、辻氏は「空虚な感情」を感じてしばしば口をつぐむ。その続きをはじめ、ますます「気味のわるい空虚」を感じる。「だまらせることが説服することでない」と氏の明敏さがつとに知つてゐるところを自ら最も悲惨な方法でたしかめただけだつた。」(160~1頁)

ついで保田は、辻家の夕食の情景を描写する。辻氏は、あいかわらず不機嫌である。夫人は、「慣れきつてゐるまゝでこの不機嫌な夫の有様がいつも不安になる。それが既に久しい習慣だつた。」そして、保田は、「それは現代では或る種の人々の家庭につねづね見られる一つの雰囲気であつた」と、さりげなくつけ加えることによって、辻氏の家庭を、典型的なブチブルジョアのそれであると暗示している。

飯を済ませてとりつくろつた食卓のまはりに家族中が集つても決して世間によくあるやうな楽しい脱線はおこらない。いつもちぐはぐな気持から感情の交錯が進んで行つた。台所の方では女中がいたつて寒さうな様子で一人で後仕事をしてゐる。辻氏はぼう然とその方を凝めて煙草を吸つてゐた。家計のことなどがたとへ気になつても、無関心をよそほふのが辻氏の生活の態度だつた。(162頁)

保田は、辻氏の家庭を、表面を取り繕つた、温かみのない、形式だけのものとして描き出している。夫婦の心のこもらない会話。台所で一人寒そうにしている女中。こうした描写のうちから、いつも快活で知的に見える辻氏=和辻哲郎の日常の、寒々とした心の空虚が浮かび上がってくる仕組みになっている。

「にがにがしい表情」、そして「例のつめたい一べつ」、それらの生みだす冷え冷えとした「空気」。「夫人は辻氏の日常の性格を知り尽してゐたので、こゝらで沈黙するのが習慣になつてゐた。子供らも急に黙りこくつてしまつた。」ここにきて、ようやく辻氏は、子供たちにやさしい言葉をかけるのだが、「けれどその声はまだ空虚さを抜けてゐなかつた。」(163~4頁)

そこへ、「故里の辻氏の実父からの手紙」がとどく。歳暮余日も無之御多忙の程察上候、貴家御一同御無事に候哉御尋申候、却説去廿七日の出来事は実に驚愕恐懼の至に不堪、就ては甚狂気浸みたる話に候へ共、年明候へば上京致し心許りの警衛仕度思ひ立ち候が、汝困る様之事も無之候か、何れ上京致し候はゞ街頭にて宣伝等も可致候間、早速返報有之度候、(166頁)

文末には、「新年言志」と題して二首の短歌が書き添えられていた。<sup>(6)</sup>この手紙を読みながら、辻氏は、「云ひやうのない感じがぞつと身体を走るのを感じた。」(167頁)辻氏は、「純粹な情熱」という点において、父の世代と若い世代とが共通していることを感じる。それに

たいして、辻氏の世代にとって、それは「切れた線」であつた。(169頁)

父のかうした純粹な感情の崇高な尊さは例へそれを個人主義的感情だといつても、たゞそれだけのことばでくつがへし得ない。しかも辻氏はこんな先からの感動の気持を無理にも止めねばならなかつた。だがかやうな父の示してゐる人格的決断を否定することは、かへつて氏の正義観を根底からくつがへしてしまつた。それ故辻氏は父の人格的決断を感情だとし、その感情を父の体験してきた維新の時代に結びつけようとした。さうすれば時代の差といふやつが、氏の正義感の破綻を救つてくれるのだ。(170~1頁)

父の言葉に否定できない強い権威を感じとりながら、辻氏は、それをたんなる「感情」に過ぎないと決めつけ、「時代の差」という理屈によって無理やり否定してしまおうとする。「ともかくかうした時代の距てが、父と子とその子との観念を分離させてゐるのだ。その範囲で辻氏は自分の論理に気をよくしたので、父への返事を書き始めた。

……それらは個人的な感情に過ぎません。役に立たないからしてはいけません。つまりあなたの考へてみられることを行ふための有効な道ではありません。明治の新政の意義は万機公論に決すといふことです。各自がその業を守るといふことです。議會制度がその具体的な意味です。よい政治のためによい代議士を選挙すべきです。これが大帝の御志です。あなたはそんな努力をしたことがありますか。(171頁)

しかし、それでも、辻氏の心を脅かすものは去らない。それは、父の「情熱の方向」が、「次の若い時代」とつながっているという認識であつた。

こんな父の情熱の方向は、それだけをとり出してみれば、異つた方向を以てより広く次の若い時代を流れてゐるのだ。辻氏は怖ろしいものを見る気持でじりじりとそのもの、周囲から一步一步本体に近づいてゆく感じがした。いたるところに怖ろしい熱情がうごめいてゐる。父が維新の精神を代表してゐるやうに、今日の若い精神は明日の時代の精神を代表してゐた。たゞ現れ方や方向が異つてゐるだけだつた。辻氏は父の超時代的な精神に圧倒されてゐさうで、その実今日の青年たちの精神に圧倒されてゐると、一瞬間考へ込んだ。(中略)熱情で貫かれぬ正義はない。熱情は感情の素朴な姿でないのだ。熱情はその中につねに理性的の内容と方向をもつてゐる。／辻氏はおき去りにされた気持を感じた。だから自己の憂鬱と焦燥が悉皆そこに因つてゐるやうに思つた。(172~3頁)

このように「蝸牛の角」全体にわたつて考察してみると、磯田光一のように、保田の辻氏へのスタンスを、

ここで注目すべきことは、小説の主人公たる辻氏が「父」にも「若い世代」にもある種のひげ目を感じていることである。これは辻氏の非行動的な自意識が近代的な知性に由来していることを意味しているが、「父」および「若い世代」の情念からの辻氏の距離こそが、じつは逆に両者の基底にある情念の劇をとらえうる眼としても機能している。(前掲、216頁)

と評価するのは、明らかに事態を見誤ったものであることがわかる。むしろ、保田は、「蝸牛の角」において、辻氏という人物を造型することによって、和辻にたいする批判、あるいは告発を意図したのである。つまり保田は、自らの内面に息づく「止みがたい」「情熱」から眼をそらし、「器用」な「思ひ付の知的遊戯」にふける知識人の「空虚」な内面というイメージを、和辻のうえに重ね合わせることによって、和辻の思想の虚偽性を指弾しようとしたというべきであろう。

ところで、保田は作品の素材をどこから入手したのであろうか。その一つが和辻哲郎の『古寺巡礼』であることは既に明らかにした。しかし、それのみでは、とうてい「蝸牛の角」を制作するには充分ではなからう。

さきにもふれたように、「蝸牛の角」の舞台は、大正十二年の大晦日である。「今年の稀有の事件以来たしかに世の中は変化した。あの地震が変化の高低のリズムの一つの高揚のやうに辻氏は考へてみた」(160頁)という叙述が、大正十二年九月一日の関東大震災を、「廿七日つて、あの虎の門……の。あの事件のことでございますのね」(167頁)という夫人の言葉が、大正十二年十二月二十七日の、難波大助が摂政裕仁親王に発砲した虎ノ門事件を指しているのは明白である。この時期、和辻は東洋大学に奉職していたが、「ある私立大学の倫理学の教授」という辻氏の設定も、正確に和辻の経歴をなぞっている。<sup>(7)</sup>

大正十二年といえ、保田は十四歳、桜井尋常小学校を卒業し奈良県立畝傍中学校に入学する年にあたっている。その頃からすでに、保田が和辻に注目していたという可能性はある。山口基編『保田典重郎年譜』(昭和41年、南北社)の、昭和五年十二月の条に「和辻哲郎著『古寺巡礼』は少年時よりの愛読書なるも、年来この地方をわが庭の如く眺めて来た余は、その批評と見方と感傷には同じ得ざりき」という保田自身の言葉が引かれている。(3頁)「少年時」がいつのことか不明確ではあるが、保田が早くから『古寺巡礼』に親しんでいたという証拠とすることができよう。「問答師の憂鬱」(『コギト』第4号)のなかにも、「和辻さんの本」という形で『古寺巡礼』への言及があり、また、「佐渡へ」(『コギト』第6号)という紀行文が、和辻の『古寺巡礼』にインスパイアされた保田自身の「古寺巡礼」であったことは疑いないところである。昭和六年四月

に東京帝国大学文学部に入学した保田が、美学美術史学科を専攻したことにも、なにがしか和辻の『古寺巡礼』が影響していたと考えられる。このように、保田が、早くから和辻の影響を受け、和辻の言動を注視していたことは明らかである。

「蝸牛の角」が制作された昭和八年、和辻は、京都帝国大学哲学部の助教授であった。京都の和辻の風評が東京の保田の耳に届いていたという可能性も否定できない。例えば「すると、その独白にもいつも教室で学生達を皮肉るときの気味のよい尻上りの口吻がやはり出てゐるのを知つた」(156頁)とか「辻氏は下唇がゆがむやうな気がした。これは辻氏がいつも学生から嫌がられる氏の独得の表情の一つだつた。その後へきつと例の尻上りの皮肉がとび出した」(158頁)といったあたりの描写のうちには、そうした風聞を素材にしなければ書けないようになりアリティが感じられる。作中の辻氏を和辻に重ね合わせることにネライがあるこの作品において、保田が、辻氏の細部の造形に配慮したことはじゅうぶんに予想されることである。

この春の試験の時だつた。辻氏はいつもする方法を改めて新しい事を試みた。／「何を書いてもよい。勿論参考書は何を見てもよろしい。……さうですね、図書館へでも入つて書いて来たまへ。それから答案は帰りにこゝへ置いておく事。今日中に出来なければ後で僕のところへ送つてもよろしい。」／それだけのことを云ふと辻氏は黒板へ「倫理学とは何か」といふ問題を書いてさつきと教室を出てしまつた。しばらくあつけにとられた教室はしーんとしてゐたので、自分のトントンと階段を下りてゆく靴音が他のもののおとをきいてゐるやうに心地よく響いた。／「辻さんの試験には面喰つたね。」／「あゝ、いつも倫理が馬鹿にされてるんで、今度はひどい問題出したんだぜ。」／こんな学生の間の評判をきくと、辻氏は心の中でふうんと軽い愉快を感じた。(157頁)

といった描写からも、学生のあいだに伝聞される「評判」が、作品の素材として生かされていると推定される。そして、実は、保田は、そうしたルートを確保していたのである。大阪高等学校の同級生で、かつ京都帝国大学へ進学した、沖崎猷之助と大東猛吉の二人が、『コギト』の同人として、保田の身近に存在していた。

しかし、保田が、たとえ少年時代より和辻に深い関心を懐いていたとしても、また、友人を通して和辻の動静を逐一つかんでいたとしても、「蝸牛の角」のすべてを、後の知識や伝聞に頼って組み立てることは困難であるはずだ。辻氏自身の独白や辻夫妻のプライベートな会話などは、もちろん、空想によってこねあげることにはたやすいとしても、そこに描写された辻氏の姿が現実の和辻とあまりにもかけ離れたものであれば、作品の意図は達成されないことになる。作品のカナメ

をなす、例えば、父親からの手紙などは、保田のでっち上げとは思えない、異様なリアリティーにあふれている。

### 第三章 二つの「蝸牛の角」

ところで、「蝸牛の角」という題名は、保田のどのような意図を示すものであろうか。このタイトルが必ずしもその内容と対応していないことは注意されなければならないだろう。この作品は、辻氏をめぐる様々な思想の対立を描いており、これを、白楽天の七絶「酒に対す」の起句に見える文句になぞらえた、と一応は考えることができる。しかし、些末な対立を酒と笑いにまぎらせるという「酒に対す」は、既に見た「蝸牛の角」のモチーフと微妙に齟齬している。

「蝸牛の角」というタイトルの由来をあれこれ詮索する前に、和辻自身が「蝸牛の角」と題する一連のエッセイを執筆している事実注目する必要がある。

和辻は、「蝸牛の角」という題のエッセイを、『思想』の大正十一年十月号から翌々年三月号にかけて、断続的に五回掲載している。それらは、「二科会と美術院」「天竜川を下る」「新聞を嗤ふ」など、いずれも、身辺雑事に託して社会批評を展開したものである。この題が、白楽天の七絶に由来することは、大正八年一月の『読売新聞』に掲載された「電車のなかで」というエッセイに「昔の人は文壇の論争などを蝸牛角上の争いだといって笑いました」（『和辻哲郎全集』第20巻、339頁）とあることから傍証される。

「蝸牛の角」と題する一連のエッセイのうち、ここで問題にしたいのは、大正十三年二月号に掲載された「一つの私事」という文章である。これは、冒頭に父親の書簡を掲げ、それにたいする自らの感慨を述べたものである。保田は、自らの「蝸牛の角」のなかで、この書簡を、二首の短歌を含めて、ほぼ正確に書き写している。保田の「蝸牛の角」が、和辻のこのエッセイからその題と内容を借用していることは明白である。

この手紙を前にして、和辻は、父親について思いをめぐらせる。一時は「反抗心」を懐いたこともあったが、「儒教で育てられた父の思想」が古くて時代に合わないといった問題をこえて、「二十五六を過ぎてから再び尊敬することを覚えた。」

父は医者であるが、医者は病気といふものをこの人生から駆逐する任務を持つてゐるといふ確信で動いてみた。父の日常の動作に「報酬のため」或は「生活費のため」といふ影のさしたことを嘗て見たことがない。(中略)父の一生はいはゞ任務を果たすための苦行の連続であつた。かくの如き苦行を続け得た父の性格を小生は尊敬せざるを得ない。(627頁)

「さうしてこの尊敬する父から上記の如き手紙を受

取つたのである。」和辻の困惑は、ここから始まる。

父は、「維新の原動力となつた尊皇の情熱」によって青春時代を成長した。

父の皇室に対する情熱は、乃木大将のそのやうに、個人的なものである。徳川時代の主従関係に基礎を置いた忠義の心持である。(中略)さう考へて来ると共に、現在の組織制度がもはや父の如き志を実行不可能なものにしてゐることに自ら気づかざるを得なくなつた。(中略)父の如き志は、今の社会ではもはやそれを有効に充たす方法がないのである。ただ何らかの方法でその心持を表現するに留めなくてはならぬのである。(628~9頁)

「表現」の方法としても、皇室警衛や街頭宣伝は、決して有効なものではない。「父の情熱は純粹であり、考も正しいが、しかし残念ながら極めて単純である。」それは、たんに「父が主観的に満足するだけのことに過ぎぬ。」いや、それどころか、「直接行動扇動者」として「拘引」されるだけかも知れない。(631頁)

このように思索をめぐらした後、和辻は、父への返書をしたためる。

志は結構であるが、それを有効に実現することが出来ない。臣民として「何の役にも立たぬ」ことを実行するよりは、「何か役に立つ」ことを実行する方が忠である。(中略)明治大帝は「万民の志を遂げしむる」ために代議制を立てられたのであるが、選挙権を有する人々は、万民の志を阻止して党利をのみはかるやうな代議士を選出した。さうすると選挙権者もまた全体として聖勅に違背したことになる。皆不忠である。(中略)すべての人が万民志を遂ぐることを理想とする忠良な臣民になりさへすれば、階級争闘などの必要はない。過激運動なども起らなくなる。従つて真に皇室を護衛することになる。この意味で忠義を鼓吹して頂きたい。／小生の手紙の大意は右の如きものであつた。(632~3頁)

こうして見ると、保田の「蝸牛の角」は、「一つの私事」における和辻の思索の跡をほぼ正確にトレースしたものであることがわかる。ただ、保田は、そこに、「辻氏は読みながら云ひやうのない感じがぞつと身体を走るのを感じた」とか、「夫人の不快な態度に対する怒りが自分の心の中に少しも起らぬもはつきりと見きはめた」(168頁)、「氏の冷静な感情からいつても、それは父の場合と比較すると極めてにがにがしく思はれた」(170頁)、「辻氏は倫理学者らしい辞句を発見すると、それを莊嚴にならべて素朴な父を脅しつづけた」(177頁)などの言葉をはさみ込むことによって、辻氏の父親にたいする態度が、極めて不誠実であるというイメージを作り上げることに成功したのである。それは、「一つの私事」に示された和辻の、父親にたいする尊敬の念と、しかしそれが今日においてはもはや無効である

という判断にもとづく、懇切な忠告とはまるで違ったものとなっていることは指摘しておかなければならないだろう。

さらに、保田は、「父のかうした純粋な感情の崇高な尊さ」を「父の体験してきた維新の時代」に結びつけ、「時代の差」という観念によって自己保身をはかる辻氏を描き、追い打ちをかけるかのように、「こんな父の熱情の方向は、それだけをとり出してみれば、異つた方向を以てより広く次の若い時代を流れてゐるのだ」というように、同じく辻氏を脅かす若い世代を登場させることによって、辻氏の退路を断つのである。

保田は、「右翼の学生」(170頁)と、マルクス主義を信奉する「堀尾」という学生をひっくるめて「若い世代」と呼び、それを辻氏の父の世代が代表する「明治の精神」と結びつけて、辻氏を「出口のない袋小路」へと追い込んでいく。そのために、保田は、「故S先生」、和辻にとっては師匠筋にあたる夏目漱石の小説の一節まで持ち出すのである。

先生が明治の精神といふものをどれ程の鋭く深い芸術家的洞察を以て知つて居られたか、はじめてわかるやうな、又わからぬやうな気がした。／辻氏は何とも形容できぬ気持を感じた。暗澹といつたやうな修辭を考へてわれながらいまいまいなくなつてしまつた。(174頁)

そして、さきに引いた最後のシーンがくる。このように考察してくれば、「蝸牛の角」が、和辻批判を意図した作品であることはもはや明らかであろう。しかし、同時に、それは、保田が早くから和辻の言動に注目していたという事実を明らかにする。保田が、大正十三年から『思想』を購読していたということは考えられないが、後にバックナンバーを入手するほどに愛読していたことは疑いない。「蝸牛の角」に描かれた、「K博士」=木村泰賢との論争、「若いH氏」=藤岡蔵六との論争は、いずれも『思想』誌上での出来事であったし、和辻の「古寺巡礼」は、『思想』の前身『思潮』に連載された。保田は、それらを、リアルタイムで、あるいはバックナンバーで正確に把握していたのである。

保田と『思想』とのもっと直接的な関係を指摘することができる。保田は、大阪高校時代、『思想』昭和五年八月号に、湯原冬美のペンネームで、「『好去好來の歌』に於ける言霊についての考察——上代国家成立についてのアウトライン——」と題する論文を投稿して掲載されている。<sup>(6)</sup>

『思想』は、昭和四年十一月号に「原稿応募」の広告を掲げて、はじめて一般からの論文を募集した。昭和五年一月号の「編集後記」は、「原稿は相当集まつたのであるが、遺憾ながら今月分には無条件で取れるものはなかつた」とある。三月号にはじめて佐木鴉介「歴史学の方角」と柳沼まさみ「マルクスの芸術的天分」の二つの応募原稿が掲載された。同号の「編集後記」

は、「一つの立場をはつきり述べたものを、できるだけ多方面に亘つて採つてゆきたい」と、その方針についてふれている。以後、志賀勝「ストリンドベリからオニールへの一線」(4月号)、齊藤善太郎「マルクスの宗教批判」穴戸儀一「新しい芸術の形式に就て」(5月号)、桜井武雄「多収穫競争について」(6月号)、栗原百寿「相対主義と浮浪的弁証法——三木哲学批判」渡部左次馬「文学形式の変革はいかにして可能であるか(横光利一作品「鳥」の貧困)」(7月号)がつぎつぎに採録され、九番目の論文として保田の論稿が八月号を飾った。それは、編集部の勧告にしたがって、「一つの立場」=マルクス主義の立場を露骨に提示したものであった。<sup>(9)</sup> 原稿公募からそれほど間をおかずにこれに応募していることからわかるように、保田は、当時、『思想』を熱心に愛読し、それに深い愛着を感じていたようである。

さらに、三年後、『思想』昭和八年七月号に、保田は「『批評』の問題」を寄稿している。これは、さきの「『好去好來の歌』に於ける言霊についての考察」とは異なり、編集部の求めに応じて執筆したものと思われる。保田の得意や思うべし。この号は「特輯芸術論」と銘打たれ、「編集後記」に

▽今月は久しぶりに芸術論特輯とした。そして芸術論特輯の場合の例にならつて新しい人達の原稿を多く戴いた。／▽沖崎猷之助氏と大東猛吉氏とは京都帝大に、保田與重郎氏は東京帝大に在学中、雑誌「コギト」の同人である。(120頁)

という紹介がなされている。

当時の思想青年にとって、『思想』はあこがれの雑誌であったという一般論をこえて、保田にとって、それは何か特別のものであったように思われる。『コギト』を創刊するとき、保田の頭のなかにあったのは、和辻哲郎の主宰する『思想』であり、そしてその前身、若い和辻や阿部次郎たちが若々しいエネルギーでもって学問的な権威に果敢に挑戦していた『思潮』のイメージではなかったか。保田は、和辻を自らの仮想敵として設定し、それを踏み台として自らの思想をきたえていったのではなかったか。そして、深い愛着に充ちた和辻を、前代の思想のレベルを代表するものとして厳しく批判することによって、自らの立脚点を構築しようとして試みたのではなかったか。

しかし、ここでは、その批判が、小説に仮託するという、いささか詐術に類する手段に訴えることによって遂行されているということは指摘しておかねばならないだろう。「蝸牛の角」は、一人の知識人の特異な内面を造型した作品と評価することはできない。それは、あくまでも、現実の和辻哲郎と対比させることで、はじめて意味をもつ作品なのである。ここに、保田與重郎の資質と、その文壇登場のための戦略が、はっきりと刻印されている。



## 註

- (1) 白石喜彦氏は、「初期保田與重郎の文学軌跡」で、「初期保田は小説を十余篇〈コギト〉に発表しているが、「発足の論理」を含む二三の作品を除いては内容においても方法においても切実な問題意識を含んではいない。十余篇の小説が統一的な作者像を結んでいるとはいえない」「保田の興味は創作よりも批評の方にあったのである」と断じている。(['国語と国文学』昭和52年6月, 29頁)しかし、保田における小説と評論の関係、独自の評論のスタイルの形成過程などの問題については、もう少しきめ細かく考察してみる必要があるだろう。また中山渡氏は、『コギト』初期の活動を検討して、その中心に保田與重郎が位置していることを確認したうえで、「彼らがなぜ小説を書いたか」という問いを立て、第一に、「方法の制約のない、虚構の可能な小説」とおして、「〈真実〉の発掘によって既成の文学観を超越しようとした」、第二に、「時代に強いられた絶望的な、暗澹とした生の危機感が現実と自我との落差をみつめ、その止揚を図る、つまり、自己の生を探究して絶対理念を究明するにはそれが「最適」だった、と総括している。(['雑誌「コギト」その創刊号をめぐって』(『上田女子短期大学』紀要)1986年3月, 15頁)しかし、少なくとも「蝸牛の角」の分析からすれば、保田は、きわめて明確な方法と戦略のもとに自らの文学を制作していたように見える。
- (2) ちなみに『全集』第1巻は、磯田の引用部分、『コギト』所載の「蝸牛の角」の最終頁をまるまる脱落させていることを指摘しておく。
- (3) 初版と大正13年再版とではほとんど違いがないが、『思潮』初出とのあいだに若干の相違がある。戦後出されたものにはさらに改変がなされている。
- (4) 桜井尋常小学校同窓会有志編『楽志』第2号(昭和7年8月)に掲載された「郷土といふこと——一つの感想」という小文で、保田は、「聖林寺の十一面観音の如き天平彫刻中でも第一のクラスに属する」と述べている。(['全集』第5巻, 258頁)この発言が、和辻の『古寺巡礼』を踏まえたものであることは疑いないだろう。
- (5) 和辻の名誉のために記しておくが、この二つの論争において和辻は誠実に対処し、そして論争に勝利している。まず、藤岡蔵六とのコーエン訳述論争について述べる。和辻は、『思想』大正11年7月号に「藤岡蔵六氏のコーエン訳述について」を掲載して、岩波書店より前年出版された藤岡の『コーエン純粋認識の論理学』を厳しく批判した。これについては、『思想』大正10年11月号に新刊広告があり、「本書は新カント派中最も有力なるマルブルヒ学派の創始者ヘルマン・コーエンの哲学体系第一巻を訳述したものである」と述べられている。和辻の批判に応じて、当時留学生としてドイツのフライブルクにあった藤岡は、同じ『思想』翌大正12年2月号に「和辻哲郎氏の批評に答う」を掲げて応戦した。これにたいして、和辻はさらに、『思想』翌月号で「藤岡氏の反駁を讀みて」をもって再度の批判を加えた。この論争は、藤岡が、帰朝後に用意されていた、田辺元の京都帝国大学移籍にともなう東北帝国大学のポストがキャンセルされるという余波を残した。和辻が問題にしたのは、基本的には、藤岡の翻訳が「完訳」ではなく、「多少の取捨選択を施し従つてその間何程かの訳者の私解を加へる」という、一種の意識になっているという点である。藤岡は「緒言」で、その理由を「余の力足らずしてこれを完全な訳書たらしむる能はざる」ためであると弁解している。これにたいして和辻は、「力足らざる者は少くとも「取捨選択」よりは「原文に忠実」であることを選ぶべきである」として、氏の

「態度は極めて不真面目である」と批判した。和辻は以下、藤岡の著作の冒頭5頁を、コーエンの原書と逐一对照させながら、コーエンの厳密に学問的に限定された「認識」「普遍」「理念」などの用語が、藤岡によって、粗雑な日用的な用法に「取捨選択」されてしまっていることを例証する。最後に和辻は、「学問のために、コーエンのために、また氏自身のために、氏は態度を新にしてこの訳述書の断乎たる改訂を企つべきである。でなければ氏の学者としての生命は失はれる」と、強い調子で警告した。これにたいする藤岡の答弁は、弁解に終始しているという感を否めない。藤岡は、「誰か抄訳によつて原意を遺憾なく十分に伝へ得ると信ずるものがあるか。訳者も読者も様なることは最初から期待し得ない筈だと思ふ」と、あらかじめ戦線を縮小し、「和辻氏の批評並に解釈は大体に於て誤つて居る」と結論したうえで、「コーエンの論理学を訳述した」と話すトフッサールが「お、神よ、あなたはあの書物を訳したと云ふのか、あなたはそれを理解することが出来たか」と語ったというドイツでの体験にふれ、自分としても「重版中止」を考えていたから、和辻の警告もあり、「到底かの訳述書をこのまゝ世に出して置くわけには行かない。直ちに之を店頭から葬つて学界並に読者に対し謝罪の意を表したい」と、同書の絶版を宣言した。これにたいして和辻は、再批判文で「一方であの書に誤謬のないことを力説しつゝ、他方で独逸の学者の前にひどく恐縮して見せるといふ二重のモーティーフは、自分にいゝ印象を与へなかつた。」むしろ「あの訳述は原著を十分に理解せずしてやつたものだから絶版にする」と淡泊に告白したらよきさうに思ふ」と多少怒りの感情を交えて批判している。和辻の意図が、細々とした藤岡の誤訳の指摘にあったのではないことは明白である。原著を正確に理解しようと努力する前に、器用に切り貼りした「訳述書」を出版した藤岡の学問的態度を和辻は問題にしたのである。和辻のこの論争における態度には、ストレートな感情の爆発はあっても、それ以外の不純な動機は何もない。それを、保田のように、あたかも自己の「明敏」を誇るための小手先の知的遊戯であったとするのは当たらない。この論争については、出隆が「出隆自伝」の「第12夜 藤岡事件とその周辺」で紹介している。その中で、事件直後、当時東洋大学で同僚だった和辻から直接聞いた話として、つぎのように伝えている。「——僕(和辻)は、あれが藤岡の訳した本だし、岩波が出版したんだから、あんなひどい本とは知らなかったもので、津田英学塾の学生にすすめ、あれで学生と一緒にコーエンを勉強しようというので読みかけた。ところが、訳文がおかしいので原文とくらべてみるとひどい無責任な訳なんだ。誤訳や誤解だけならいいが、やり方がずるい。だいたい抄訳のできるような本ではない。岩波書店も抄訳をたのんだわけではないのに、大きすぎるからといって自分で抄訳にきめたんだそうだ。抄訳なら抄訳で、抄訳の仕方というものがあつた。藤岡の抄訳というのは、自分のわからんところや訳せんところを抜かしたりごまかししたりしておいて、これを正当化する手段にすぎない。あれでは第一、津田英学塾の学生に対しても、僕としてはほつとけなからな。」これは、ほぼ当時の和辻の心情を伝えたものといえる。また、出は、この論争の背景に、新設される東北帝国大学法文学部の哲学講座のポストにからむ「暗いかけ引きや見にくい奪い合い」があつたのではないかと伝えている。しかし、これは、いわば風聞に近いものであり確実なものではない。湯浅泰雄氏は、出の発言などもふまえて、和辻はこの事件を契機として心境の変化をきたしたのではないかと推測している。「もともとこの一文は、彼が『思想』の編集をしていた関係から、一種の埋め草的雑文として軽い気持で書かれたものと推測されるが、たとえ

学問的に正当な理由があったにせよ、自分の一時の気分から書いた文章が他人の一生の運命に影響を及ぼしたり、周囲から痛くもない腹をさぐられるという後味のわるい結果になってしまったからである。その点、この事件はその後の和辻の対社会的態度を決定する上で一つの意味があったといえよう。彼はこれ以後、気に染まない依頼原稿や講演は一切ことわって研究に専念する態度をつらぬいた。『和辻哲郎 近代日本哲学の運命』昭和56年、ミネルヴァ書房)しかし、藤岡との論争が「埋め草的雑文」から結果した思わざる展開であるという理解は、大学のポストにまつわる裏工作という風評と同じく、和辻の意図を充分理解したものとはいえない。和辻が専門的な研究ににだいに沈潜していくについてはそれなりの理由があるのであり、この論争と結びつける必要性は少しもない。

『思潮』創刊号(大正6年5月)に「日本文化に就て」を掲げて日本文化の研究を志して以来、少なくとも昭和2年にドイツに旅立つまで、和辻は、一貫して論争的であった。とりわけ、つぎに取りあげる木村泰賢との論争は、木村の肉体的生命をさえ奪ったと評価されるほどに激烈なものであった。しかも、和辻は、専門的な研究者にたいして一步も引かず応酬している。和辻は、大正14年に京都帝国大学に招聘され、本格的に学究としての道を歩み始める。和辻が最初に取り組んだのは、原始仏教の問題であった。『思想』大正15年1月号に「初期仏教資料の取扱ひ方に就て(上)」を発表した後、「原始仏教の根本的立場」「原始仏教の縁起説」「原始仏教に於ける「道」」をたてつけに連載し、それらは、昭和2年2月『原始仏教の実践哲学』として岩波書店より刊行された。同じ2月、和辻はドイツへ向けて旅立つが、その船の上で執筆された「木村泰賢氏の批評に答ふ」は、『思想』昭和2年4月号に掲載された。論文の末尾に「於南支那海、三月一日」の日付が付されている。これは、『宗教研究』に昭和2年1月から5月にかけて三回にわたって連載された木村泰賢の「原始仏教に於ける縁起観の展開——(特に赤沼、宇井、和辻諸教授の説を讀みて)——」と題する論文にたいする反論として起草されたものであった。そして、木村の論文は、和辻が、さきの一連の論文において、宇井伯壽の先駆的な研究を援用しながら、伝統的な解釈の代表として専ら木村の『原始仏教思想論』(大正11年)をとりあげて批判したのに答えたものであった。木村の和辻批判の論点は、二つである。一つは、和辻は、新カント派など近代の論理学の知識を原始仏教の解釈に持ち込んでいるのではないかという疑い。もう一つは、和辻の經典解釈が恣意的であるという批判。第一の疑いについて、和辻は、仏教の縁起説のうちに「論理的関係」を見出だすということと、仏教を「近代的論理主義の立場」から解釈するということは自ずから別の問題であると指摘する。和辻は、「この点に於て私は反つて木村氏自身の解釈が、ドイセン風に、あまりに多くシュopenハウエル思想を原始仏教に注ぎ入れてみること、不満に思っている」と一矢を酬っている。第二の批判について、和辻は、經典が仏

陀という一人の創造した体系的な教説ではなく、様々な系統をもった複数の物語が長い時間をかけて組織されたものであり、經典のうちに互いに矛盾する論理の系が存在することを率直に認め、そうしたいくつかの系が、歴史的な経過のなかでどのように壮大な体系へと組織されていったかを明らかにするという和辻の方法を、木村が少しも理解していないと指摘する。和辻は、各經典の全体を矛盾なく体系的に解釈しようとする木村のやり方は、歴史的な発展を無視することによって、かえって、異質なものを隠蔽する結果になると批判する。いずれの論争においても、和辻は、明確な方法論をもって議論を展開している。和辻の知的誠実を疑う余地はすこしもない。和辻の論争的態度について、吉沢伝三郎氏の「およそ保身を慮ることなき率直な論争態度には、私たちの以て範とすべき点があるように思われる」という評言がある。(『和辻哲郎の面目』34頁、1994年、筑摩書房)なお同書において、吉沢氏は、和辻の藤岡批判がほぼ妥当であることを詳細に論証している。

- (6) 『全集』では一つめの短歌の一字を脱落させていることを指摘しておく。
- (7) ただし、保田がマルクス主義の学生を登場させたことには、この小説の設定から三年後の、京都帝国大学奉職中の大正15年、京都学連事件に関連して河上肇と論争した事実、多少なりともマルクス主義の思想に共感を懷いた保田自身を取り巻く状況などが連想として働いていたものと考えられる。また、「その専門の方面では世界的に及ぶものが少いと云はれてみたK博士」との「論争」も、大正15年から昭和2年にかけての出来事であり、大正12年の時点ではまだ三年先の未来に属することがらである。その意味で、保田は、この作品において、和辻の経歴を正確にたどろうとする意志はなかったと思われる。和辻に関する諸々の事実は、自らの意図を実現するという目的の範囲内で要請されたのである。
- (8) この件について、保田の同級生西川英夫氏が『全集』第5巻「月報」所載の「プリリアント・クラスの明星——保田與重郎の思い出」で、つぎのように回顧している。「九月はじめに学校に出たらクラスは騒然としていた。同じクラスの保田與重郎、身体は大柄だが、あまり目立たぬ存在であった保田の論文が、哲学雑誌「思想」に掲載されていたのである。「言霊」という題名と、万葉集に関する文章であったことだけは今も覚えている。「思想」に十七、八歳の少年の論文が掲載されたのだから、誰もが驚いたのである。」(3頁)
- (9) この論文に関しては、磯田前掲書に分析がある。この論文については、後日論じつもりであるが、ここであらかじめ論点を示せば、保田のこの論文は、文体と方法の両面において福本和夫の圧倒的な影響のもとに執筆されたものである。

(付記) 引用文中で新字体のある漢字はそれに改めた。

(平成7年9月8日受理)